物刀拵扇子傘職巢子屋蒸立芋せんべい屋烟管南艸入錦繪板行屋番付之作者是又數多申盡がたく相應之渡世にも相成就中乘込之節は船屋幷ニ仕出し屋蠟燭油酒其外わら艸履迄賣切うどん屋など表を〆る程之賑ひ左ある時は一己之利欲とは申がたし乍恐金銀融通之端にも相成可申哉仁左衞門を召抱ゟ義は座組全體不都合ニゟ故仁左衞門手明きを待受尾州表より立歸りゟと直樣應對仕召抱ゟ義ニ御座ゟ外方芝居も仁左衞門抱度存心ニゟハゝ手段如何程も可有義與奉存ゟ手段と申ゟ而も兎角金銀之威光與奉存ゟ元より吉三郎ニ恩義もなく又恨もなく唯芝居興行之爲斗りニ而外より金銀借り集メ仕ニは無之身輕キ私ニゟへは手元金銀之有丈衣類道具等迄引當ニ差入是斗ハ私一人之了簡ニ御座ゟ如此心底ニゟへは當時利キものゝ役者召抱ゟ方私共之利分與奉存ゟ勿論吉三郎へ當テ付んとて我金銀を費可申義可有哉夫とも偏執ニも存ゟハゝ藝道相勵ミ不相替大入を取銀主藏入も宜敷やう實意を以て被致ゟハゝ是又大立物之吉三郎ニゟへは誰か召抱可不申哉歌右衞門奉願上ゟ通何卒此段篤與得會仕向後無宿意芝居興行可相成樣致呉ゟ樣乍恐御利害被爲　仰付被下ゟハゝ私共も廣太(大)之御慈悲與難有可奉存ゟ以上

年號　月　日

善兵衞印

〔編者曰ク原本此ノ所約壹丁空白〕

一土瓶いかけ

佐兵衞おまき戀妖土瓶いかけ長はなし

父母は西國唐津の產なるが故あつて浪花の住居わづかのいとなミして暮しけるがついに父母は身まかり娘一人のミなし子と成て樣々のかんなんかぞへがたく玉造伊勢町の裏店にくらし賃仕ことして其日をおくり居る折しも近邊の御屋敷に久しく男奉公を勤居る佐兵衞といふものあり生得正直者にて至つて文盲なるものあり深き緣にやフト此まき女と馴染いつとなく夫婦のかたらひをなしけるが右佐兵衞正直一へんにて世渡りの種とては何も知らず商ひはもとより元手とてはなしよし金が有ても中々出來るやうな人がらてはなしほんのまき女が親の商賣土瓶いかけをする事をよくおぼへ居ることなれハまづこれを立木の生業と佐兵衞諸ともくらしけるが玉造にもすミかね堀村へ宅替いたしけれ共何をいふてもまき女ひとりの女の手わざ勿論へんどゆへ仕事もなきゆへ佐兵衞も俱々わらぢなとを作りて暮しけるが爰にも住かねて又々ゑさし町へ引うつりけるがいよ〳〵烟りも立かねけるゆへ夫婦相談して町々を廻らんと土瓶いかけ〳〵といふて歩きし所兩人の運の開らく時にや町中の大評判となり子供にまでも知られ歌にも諷ハれ芝居狂言にまでくわへられるほどの大評判おしのつがひのめうとづれ定めておまきが悋氣ふかいゆへじや有ふと町中の取沙汰中々そんな事てはなくまき女はうまれ付ての大きな吃りニて土瓶いかけハよくすれども町々をいかけ〳〵といふことならず夫故佐兵衞に土瓶いかけ〳〵といわせてさきへあるかせ直してくれよといふといかけハまき女がいたす也うハさと違ひいろやりんきではなくはなれがたなき商賣が則チおしのつがひこれ自然の道理にておまき佐兵衞おし鳥の道行土ひんいかけの商賣に水ももらさぬ女夫中とはよくはまり段々と繁昌して今はめてたく世をやす〳〵とくらしける

其頃大坂市中はいふに不及近在近國までも夫婦づれにて物詣などするを土瓶のゐかけ唯イカケともいふ其以前ハ二股大根離れてもおさよと源兵衞ハ離りやせぬといふ歌はやりし頃はおさよ源兵衞といひ又は置錢近頃ハラクダなどゝいふ流言のひとつと成たり

どひんいかけ

むつまじや日の六月もいとひなく御そんじもられた夫婦づれ人にわらハれなぶらりよがとしに不足も何の
そのひるもかまハず□□見てこぼれぬ手ぎハいかけやとぢまんまぜりにゆきすぎる〳〵まちもふけたる女房
ハそれと見るよりむなづくしコレなんぞいのふどひんさんいつたいかふ成たハなミたいていのことかいナ
アはつの御けんの其むかしとこへも入ぬ其さきにいかけのまへも何のそのあすなふらりよとまゝにして心
でやほな□□□□むかしハわしもなけふまだまくらのふたへやる手さへほし大こんのばからしいヤアぬ
かしたりねこまたばゝその手でこれまでかきのめされまふけにのり地でそゝりぶし〳〵たでくふむしもすき
ぐ〳〵とやらどひんいかけがあたりどし

挿繪及ジンク版目次

繪本壬生狂言噺―(3―11)
すなもち鼻黑噺―(26―34)
琉球人來朝行列圖―(47―49)
寛政二年七月相撲番附及谷風小野川土俵入の圖―(59―62)
燈心屋娘孝行語―(73―79)
天滿川崎孝行噺―(94)
洛陽六角堂略緣起―(115)
天滿天神造物略緣起―(130―135)
邪羅の開帳―(153―158)
おどけ洗濯所より蛋虱蚊ども〳〵御申出の事并に蚤虱蚊のねがひ書―(173)
寛政六年八月相撲番附―(188―190)
浪花忠孝傳插圖其一―(203)
寄進芝居興行立札―(229)
知恵板其二―(251)
博奕停止のお觸―(14―16)
玉造稻荷大明神砂持之圖―(35)
寛政二年五月相撲番附及谷風小野川横綱免許―(53―58)
孝子兄弟六人傳插圖―(82―83)
多鳥目山富壽亥初春(上)―(96―104)
伏見屋四郎兵衞町の出火―(120―121)
奉納阿彌陀池造物緣起書―(137―146)
諸人開帳參詣人緣起(上)―(159―161)
おきくむし歌だいこ―(192)
浪花忠孝傳插圖其二―(211)
知恵板其一―(249)
天王寺名所付―(264―265)
豐歲世の中吉々榮花砂持―(19―25)
御神德富貴砂持―(36―42)
養女孝行燈心家由來―(64―72)
佚癖忌孝子實談―(87―93)
多鳥目山富壽亥初春(下)―(105―113)
稻荷造物緣起書―(122―129)
大坂寺社內造物開帳品定―(147―152)
諸人開帳參詣人緣起(下)―(162―165)
怨の字―(179)
浪花忠孝傳―(199―204)
大おどり見立角力―(226―227)
知恵板其一―(249)
五重塔再建寄進頼み口上―(275)

ねぬものゝ番ニ附ケ—(284—285)
擬御文章—(313—314)
六論衍義大意—(326—329)
初春三福話—(364—370)
御聞位官金元相撲番附—(389)
土中の釜—(408—409)
狂作あほだらきやう—(434—437)
うぞが〳〵—(441)
堀江踊—(454—456)
鳴釜煎—(476)
奉納の絵馬—(495)
紫式部投扇子圖繪(下)—(502—503)
葬の引札—(516—517)
いろは歌孝行鑑(上)—(530—533)
莫性踊化参—(567)
浪花川西地面凹見立角力—(286—287)
古景盤好家番附—(318—319)
六論衍義大意跋—(343—344)
長柄人柱年忌施入勧誘—(372)
子供すまふ番附—(390)
釣物祕傳—(419)
畫嘶—(438)
湯鮒の珍事—(444—445)
道頓堀俄太鼓番附—(457—463)
新町俄囃子—(483—487)
永茂船—(498—499)
なぞとき坊主の口上—(504)
萬年青—(520)
いろは歌孝行鑑(下)—(534—537)
觀經の異譯—(310—312)
福むすめの見世もの—(320—321)
爲拜傳授御笑鑑—(353—363)
福助折形工夫の傳—(386—388)
淀川筋洪水—(392—393)
新町の火事—(424—425)
德利子の見世もの—(439—440)
新町ねりもの—(448—453)
博奕の張札—(473—475)
天滿宮正遷坐俄ねりもの—(488—493)
紫式部投扇子圖繪(上)—(502—503)
とんちなぞ—(508—511)
簡爐—(528)
芝翫璃寛流行物見立勝負—(553—556)

年	號	干支	紀元	西暦
寛政	元年	己酉	2449	1789
	二年	庚戌	2450	1790
	三年	辛亥	2451	1791
	四年	壬子	2452	1792
	五年	癸丑	2453	1793
	六年	甲寅	2454	1794
	七年	乙卯	2455	1795
	八年	丙辰	2456	1796
	九年	丁巳	2457	1797
	十年	戊午	2458	1798
	十一年	己未	2459	1799
	十二年	庚申	2460	1800
享和	元年	辛酉	2461	1801
	二年	壬戌	2462	1802
	三年	癸亥	2463	1803
文化	元年	甲子	2464	1804
	二年	乙丑	2465	1805
	三年	丙寅	2466	1806
	四年	丁卯	2467	1807
	五年	戊辰	2468	1808
	六年	己巳	2469	1809
	七年	庚午	2470	1810
	八年	辛未	2471	1811
	九年	壬申	2472	1812
	十年	癸酉	2473	1813
	十一年	甲戌	2474	1814
	十二年	乙亥	2475	1815
	十三年	丙子	2476	1816
	十四年	丁丑	2477	1817

昭和三年三月二日印刷
昭和三年三月七日發行

（非賣品）

編纂校訂者　大阪市西成區松原通二丁目四三　船越政一郎

發行者　大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内　浪速叢書刊行會代表理事　江崎政忠

印刷者　大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五　長谷川泰三

印刷所　大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五　桃谷印刷株式會社　電話南三〇六二番　三七二二番

發行所　大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内　浪速叢書刊行會　電話土佐堀六六二二番　振替口座大阪七七三六三番

浪速叢書

不許複製

第五

一　本叢書は、元和以降この浪速――我等が愛するこの大坂――に關する編著記錄のうちから、過去の浪速文化を回顧せしめ、未來の浪速文化を生ましむべき、眞に永遠の價値あるもの――中には未刊行のものが大部分を占めてゐます――を收め、後の世に傳へたい希望の下に着手されたものです。

一　本叢書の題字は、帝室御物聖德太子御筆『法華經義疏』の寫眞のうちから求め出したものです。我國に於ける文化工藝の祖におはすばかりか荒陵山四天王寺の創建者として我が浪速との因緣が頗る深い太子の御筆蹟を、我が叢書の題字とすることを得たのは、本書の誇りと考へてゐます。

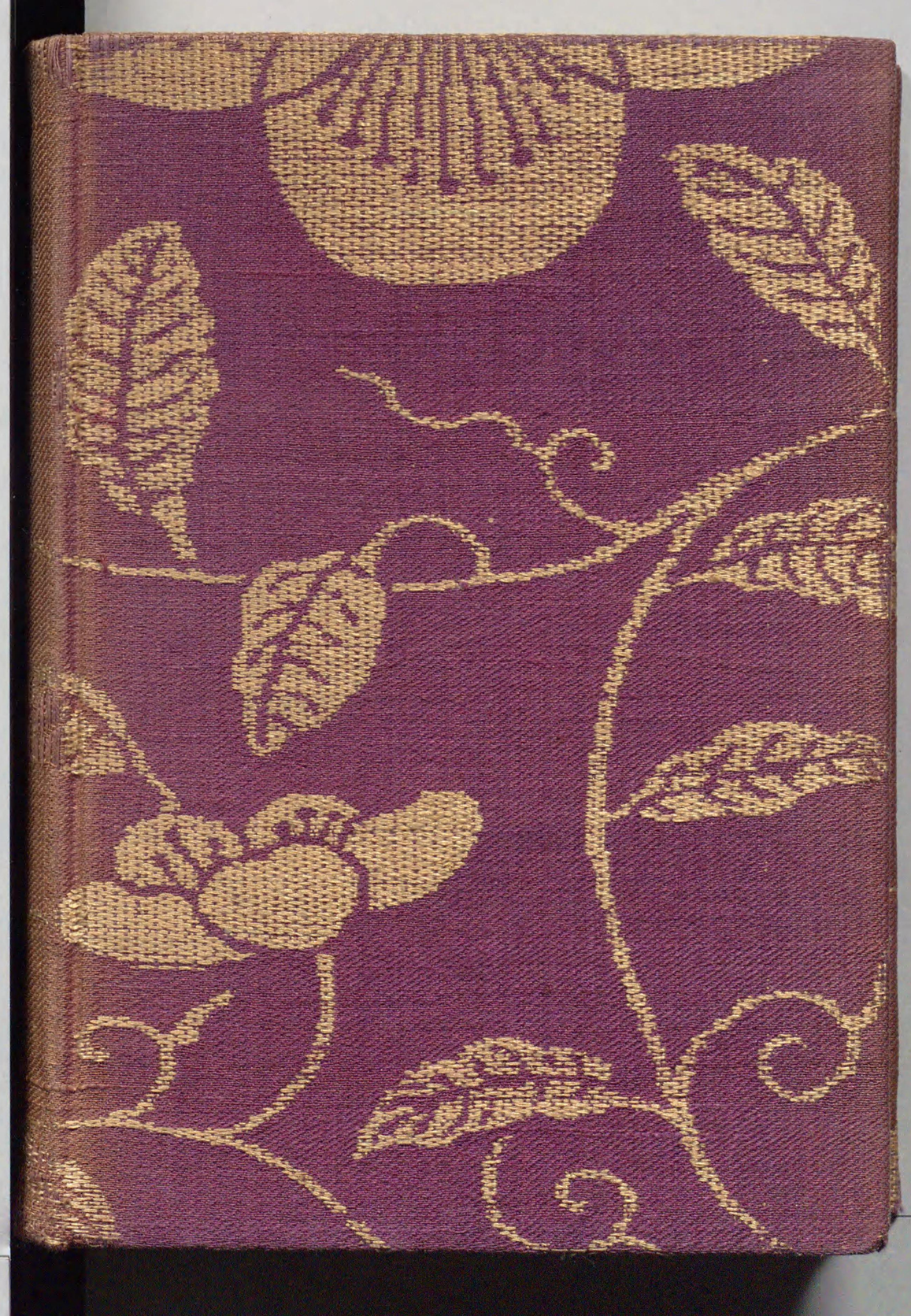
一　本叢書は原本の插畫を一枚も省略せず、力めて原本の面影を傳へたいと心がけてゐます。

一　本叢書の用紙は王子製紙株式會社の別漉紙で、成るべく讀者諸氏の眼の疲勞を輕減したい用意が籠つてゐます。

一　本叢書の組版印刷製版製本これらの技術は桃谷印刷株式會社が其の一切を擔任し、及ぶ限りの努力を惜しまないとの意氣です。

一　本叢書見返しの畫は、日本畫壇の異彩菅楯彥氏の筆。表紙の布は、我國織物界の偉材龍村平藏氏の意匠に成つたものので、現に我が讀書界に好評嘖々たるものがございます。

一　本叢書刊行會の理事は伊藤秀雄、林安繁、堀越壽助、室谷鐵腸、小林利昌、江崎政忠、木間瀨策三、森下博、末吉一郎の諸氏。顧問は今井貫一、和田萬吉、幸田成友、內藤虎次郎、內田貢、黑板勝美、藤井乙男、新村出、關一の諸氏、相談役は石割松太郎、橋本耕之介、南木芳太郎、上松寅三、佐古慶三、三宅吉之助の諸氏です。（諸氏の姓名はいづれもいろは順に依る）

浪速叢書（全拾六卷）所收目錄

第一　攝陽奇觀
第二　攝陽奇觀
第三　攝陽奇觀
第四　攝陽奇觀
第五　攝陽奇觀
第六　攝陽奇觀
第七　攝津名所圖會大成
第八　攝津名所圖會大成
第九　大阪商業史資料
第十　大阪訪碑錄
第十一　大阪訪碑錄
第十二　地誌
第十三　地誌
第十四　風俗
第十五　演藝
第十六　索引